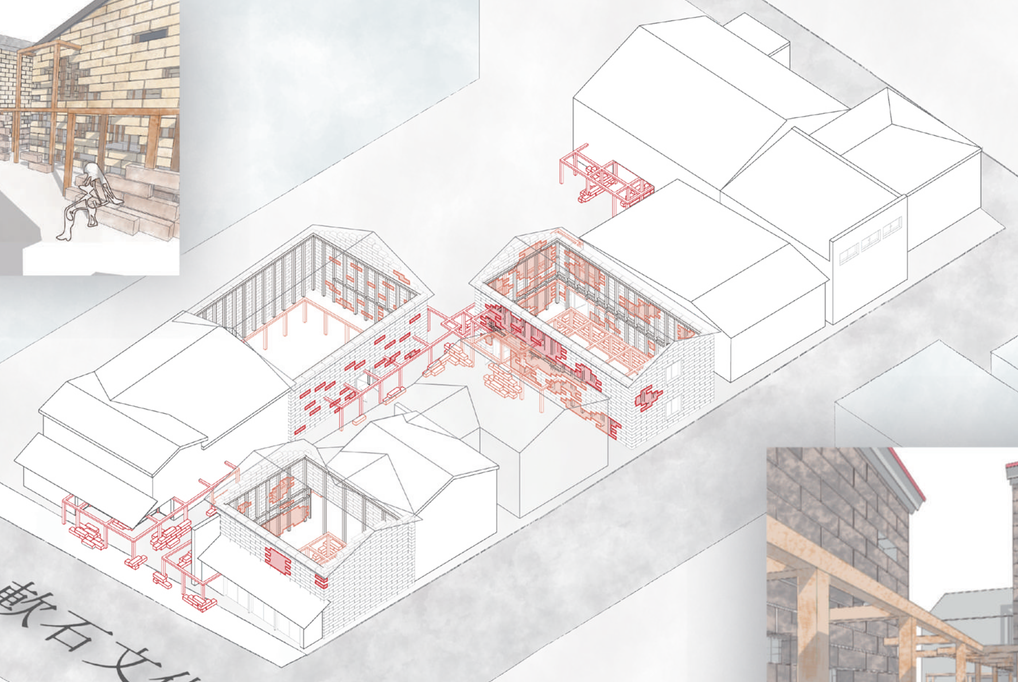
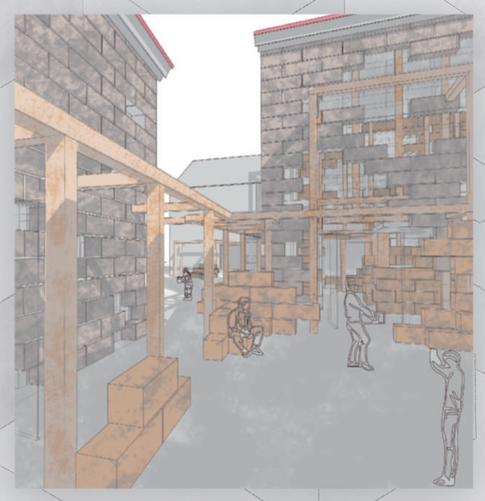
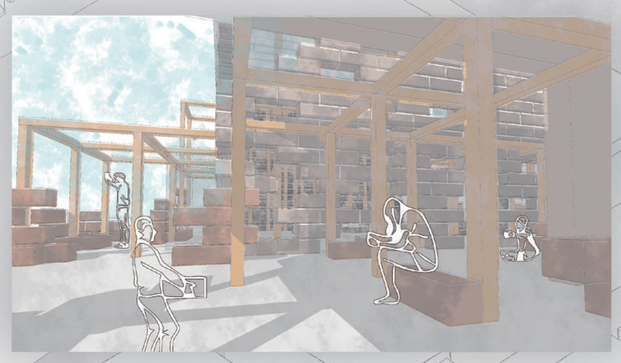
軟石 Replace ―解体を起点とした軟石文化の再構築―





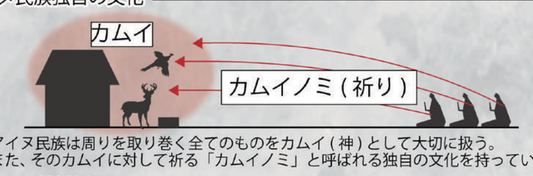






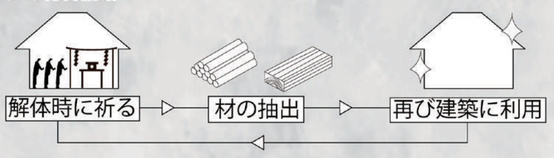
1 アイヌ民族の文化と現代の建築の解体

アイヌ民族独自の文化



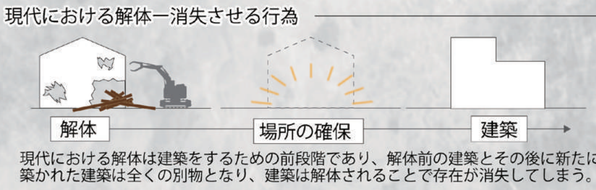
アイヌ民族は周りを取り巻く全てのものをカムイ（神）として大切に扱う。
また、そのカムイに対して祈る「カムイノミ」と呼ばれる独自の文化を持っている。

アイヌの材料循環



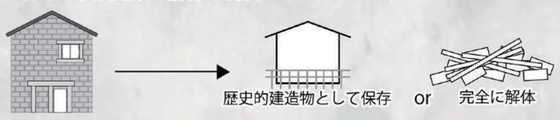
アイヌ民族は住居を解体する際にカムイノミを行い、材の魂を天界に送ったのち再び建築に利用するという独特の材循環サイクルを持ち、建築行為を行っていた。

現代における解体―消失させる行為



現代における解体は建築をするための前段階であり、解体前の建築とその後に新たに築かれた建築は全くの別物となり、建築は解体されることで存在が消失してしまう。

小樽における軟石建築の解体の現状



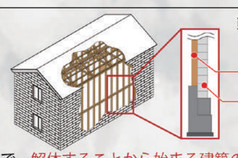
北海道の小樽には軟石と呼ばれる石材を用いた建築が数多く存在していた。現在その軟石建築は解体され年々数が減っている。軟石建築を残すため歴史的建造物として保存する運動も進んでいるが、軟石建築は固く守られるか完全に解体されてしまうかという二極化の動きが強まっており、軟石文化が薄らいでいく懸念がある。そのため、現在のような二極化ではない新たな軟石建築の行く末を考える。

2 おもかげを残す解築行為

新しい解体とそれに次ぐ構築―文化を残すための行為



解体≠消失
解体行為がその建築の文化を伝播させるサイクルの始まり



我々は解体される際に獲得した材を周囲の建築に付与して場を構築することで、解体することから始まる建築の持つおもかげや文化を残していくという一連の流れをこれからの時代の「解築」行為として提案する。



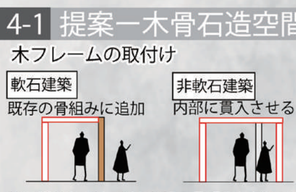
3 解築による文化継承と新たなコミュニティ



木のフレームを一定の範囲の建築それぞれに取り付け、解体された軟石を付与する。軟石建築が解体されることで、木骨石造の空間構成をが新たな風景として立ち上がり、小樽地域でのコミュニティ形成のための場として拡がっていく。

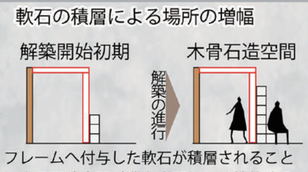
4-1 提案―木骨石造空間を継ぐ

木フレームの取付け

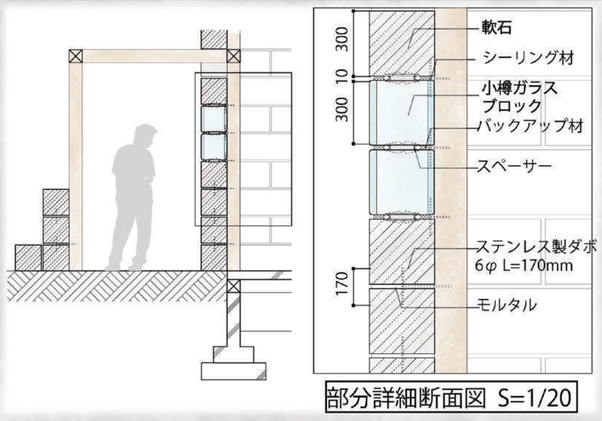


軟石建築に対しては内部の骨組みに追加する形、それ以外は内部に貫入する形で取り付ける。

軟石の積層による場所の増幅



フレームへ付与した軟石が積層されることで木骨石造空間が滞在空間として機能する。



部分詳細断面図 S=1/20

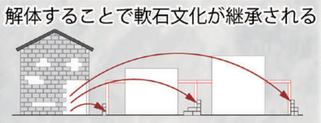
4-2 解体で拡げる軟石建築・文化

解体によって隔たりを解く



組積造の外壁を持つ軟石建築は外との隔たりが強いが、解体時の抜くという操作が隔たりを解き、今までになかった外部との関係が築かれる。

解体することで軟石文化が継承される



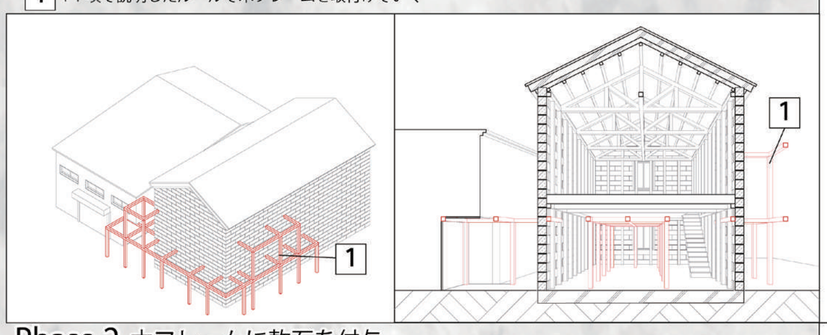
防ぐことができない軟石建築の解体をネガティブに捉えず、解体される軟石を使って場づくりを行うことで文化は残り続ける。

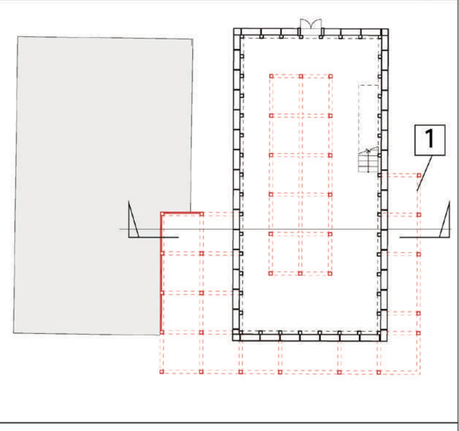
5 軟石を用いた解築の様子

敷地の範囲の中の一棟を例に挙げ、軟石建築の解体とそれに次ぐ木骨石造空間構築の様子を 3 段階に分けて説明する。

Phase 1 木フレームを取り付ける

1 4-1 項で説明したルールで木フレームを取付けていく

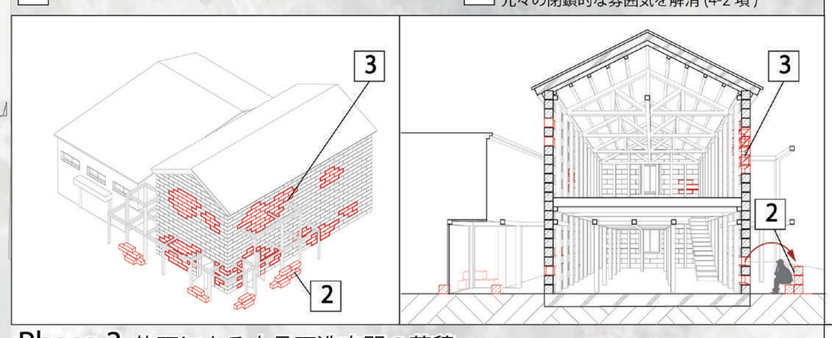


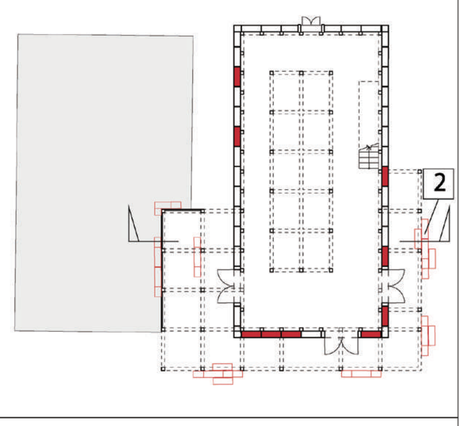


Phase 2 木フレームに軟石を付与

解 軟石を外していく　　築 軟石が抜けた隙間にガラスブロックを取り付ける

2 解体された軟石を外の木フレームに付与・滞在空間化　　3 軟石がガラスブロックに置き換わり、元々の閉鎖的な雰囲気を解消（4-2 項）

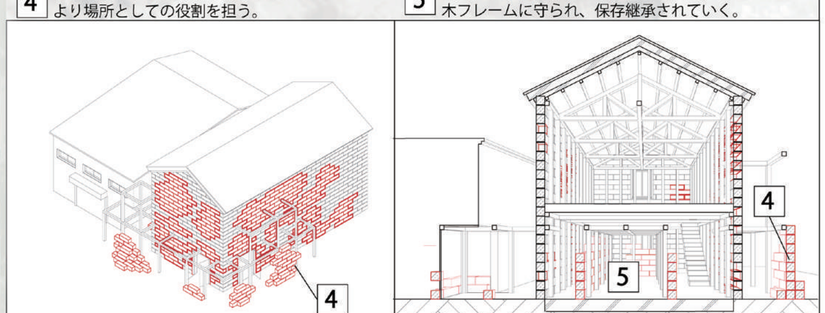


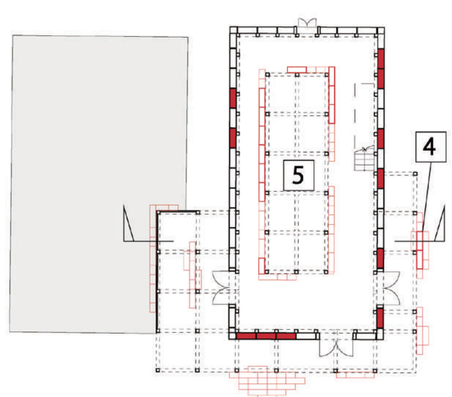


Phase 3 軟石による木骨石造空間の蓄積

解 軟石建築が解体されていく　　築 軟石の空間が積み上がっていく

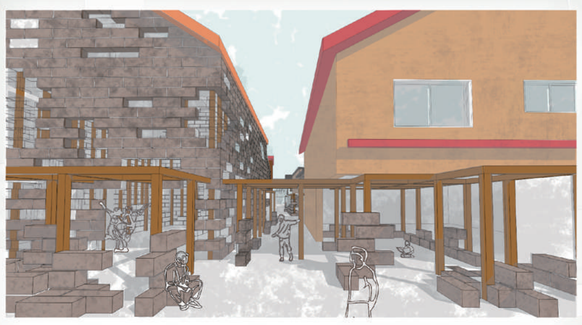
4 Phase 2 からさらに軟石が積み上がり、より場所としての役割を担う。　　5 内部に積み上げられた軟石は、既存の外壁や木フレームに守られ、保存継承されていく。





6 軟石が巡り、軟石の場を環る小樽



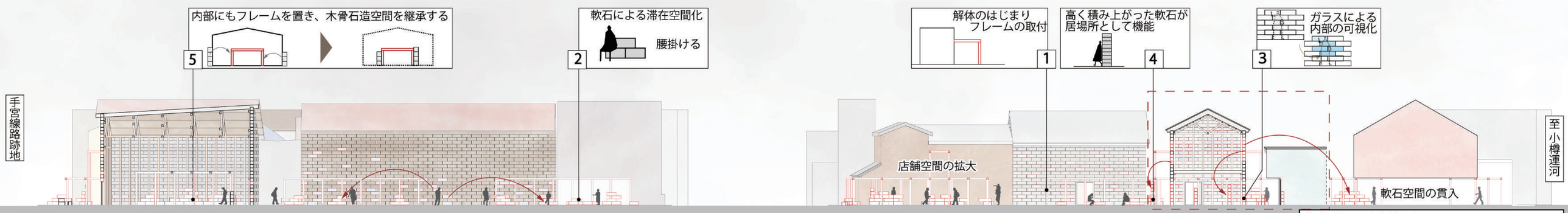


路地に軟石や木のフレームが広がり、居場所ができた様子



軟石建築が解体され、新たな木骨石造の空間が築かれる様子が可視化される

7 可視化される解築による軟石文化の伝播過程



全体断面図 S=1/250

軟石建築の解体と木骨石造空間の構築が進むに連れ、軟石の場が溢れる道へと変化していく

代表者 ： 小林智也
メールアドレス ： tomoya145@icloud.com